

第11回 私たちの信仰は神の忍耐の賜物です

第6章 9節から12節 一人前のキリスト者の生活(2)

- 9 しかし、愛する人たち、こんなふうに話してはいても、
私たちはあなたがたについて、もっと良いこと、
救いにかかわることがあると確信しています。
- 10 神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、
あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、
神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません。
- 11 私たちは、あなたがたのおのおのが最後まで希望を持ち続けるために、
同じ熱心さを示してもらいたいと思います。
- 12 あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、
約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしいのです。

この前、全部は語り切れなかったので、今回は途中からということになりますが、第6章の「神がお許しになるなら、そうすることにしましょう」という3節のところから8節のところまでを学んで来ましたので、ここでもう一度幾つかのポイントを確認し、それから9節以降の学びを進めてゆきたいと思います。

- 6章1,2 だから私たちは、死んだ行いの悔い改め、神への信仰、種々の洗礼についての教え、手を置く儀式、死者の復活、永遠の審判などの基本的な教えを学び直すようなことはせず、キリストの教えの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう。
- 3 神がお許しになるなら、そうすることにしましょう。
- 4 一度、光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、
- 5 神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、
- 6 その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。
神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱するものだからです。
- 7 土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。
- 8 しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなり、やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます。

<一度とは>

この「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになる云々」と書いてあるところ、ここの「一度」という言葉は非常に大事な意味をもった言葉です。

新約聖書には「一度」という用語が全部で39回使われておりますが、その中の11回がこのヘブライ人への手紙に出てくるのです。従って、この手紙は、「一度」という言葉を用い

て、「神の臨在を示された経験」ないし「神からの明確な啓示」を、とても貴重で大切なものと捉えている書物と考えます。

「一度神の光に照らされて」という「光に照らされ」という言葉と平行して書かれている「天からの賜物を味わい」というこの二つの言葉に関しては、信仰の先達である多くの神学者たちが色々な意味づけをしています。

例えば、「光に照らされ」というのは「バプテスマを受けること」であり、「天からの賜物を味わう」というのは「聖餐にあずかること」であるという説があります。

また、別の説では、神の啓示をいただき、御言のひらめきを与えられ、神の大きな罪の赦しにもあずかり、大いなる神の恵みを体験しながら、それでも神に従い切れない人間は...とも訳すこともできるでしょう。

かように、解釈によって色々な訳が出て来るわけです。そういう点で、著者がどういうつもりでこの言葉を書いたのかははっきり言い切れないのですが、少なくともこの「一度」という言葉の中に含まれている内容としては、「イエス・キリストの贖罪の事実、あのカルバリの十字架の事実、あるいはイエス・キリストの受肉の事実、イエス・キリストの復活の事実、イエス・キリストの昇天の事実、というようなイエス・キリストに関わる出来事」があるのです。

神が歴史の中に与えてくださった、それらの出来事を本当に自分たちのものとして受けとめ、それによって生きている恵みを神から与えられていながら、いつか知らぬ間にこの世の基準の中に押し流されて、信仰が光失せたものになってしまう人々にとっては...ということにもなるわけです。

私たちが神の御言に従って生きる、その神の素晴らしい御言は、即ち、私たちを生かしていく力を帯びた御言だということです。ですから、私たちを生かしてゆく御言葉をいただきながら、その御言葉に従って生きていない事実、これに対して、「墮落した」という訳が出てきますけれど、この「墮落した」と訳されている言葉は旧約聖書の箇所や他の書物で読んで見ますと、「そこから迷い去った者、迷い出た者、あるいは脇道に落ちてしまった者」というような意味で使われているのです。

ですが、新約聖書の中でそういう使い方をしているのは、この手紙のこの箇所だけです。言い換えると「一度、神によって贖われ、救われていながら、その御言葉に従わないで福音信仰を放棄してしまったような人に対しては」という意味にまで踏み込んで使っているのは、新約聖書の他の箇所にはそういう扱いは見られないのです。

「ただ一度だけ」とここで使われているわけですから、著者が本気になって彼らが置かれている状況の中で「今」すがり付かなければならないものが何なのか、自分を建て直して行くために、今、必要なものは何なのかを語るためにはどうしてもここで「墮落」という言葉とか、「一回限り」という意味で「一度」という言葉とかを使わなければならなかったのです。だからこの部分は実に重要なことが語られているのだということです。

＜福音信仰からずり落ちる者への警告＞

ですから6節は、イエス・キリストを信じる福音信仰から墮落した者、あるいは、そこからずり落ちた者、言い換えれば、迫害（具体的な力による迫害、文明的な文化的なものによる迫害、知らず知らずのうちに犯してしまう日常生活の慣習化された迫害など）に負けて信仰を断念した者への厳粛な宣告なのです。

私たちの目には、今、迫害が起こっているようにはあまり見えませんが、実は、日本の中に住んでいますと、比較的簡単に福音信仰からずり落ちることが「有り得る」のです。しかも、ずり落ちながら自分ではまだ信仰に立っていると思い込んでいる、墮ちたとは思っていない。そういうありようも「ある」ので、（つまり、そんな風に半端に生きている姿も実は大きな意味をもっているのですから、）この箇所は、私たちの国民性とか民族性に対して示されている大切な箇所なのだと読むこともできるのです。

（鋭い指摘で心していかなければならないことに胸を刺される思いです。）

では、私たち自身がここで何を考えていかなければならないか。それは、神がなさしてくださった恵みの御業を本気で受けず、喜んでそれが自分の命となるような生き方をしない者は、よしんば自分が神の民でありたいと欲したとしても、それはもう「できない」ことだということです。

「キリストの十字架は、人間の歴史の上では一回だけ、あのカルバリの丘に立てられたのであり、もう一度十字架についてくださいとは言えないのですよ」と語りかけています。

「悔い改める」とは、私たちの生きざまを今度は神の方向に向けて歩み直すことです。から、それを止めてしまうのは、再び神を無視し、排除して生きること、神を捨てたことになります。だから、

「一度捨ててしまったものは、もう一度拾おうとしても拾えません」ということです。

「かつて、旧約時代にあなたがたが一度拾った信仰をあなたがたは捨てたけれど、神はそれを大きな憐れみをもってお返しくださった。それが御子イエスの受肉であり、御子イエスの十字架の受難だった。しかし、そうまでして極限まで愛してくださっているのに、そのことに心を留めず、尚も自分の思いのままに生きていこうとしているのだから、もはや神の前に立ち返ることができなくなるのです」と大変厳しい語調で語るのです。

ですが、そんな語調で語った著者が、9節になると、突然まるで違った表現をとるので

第9節、

しかし、愛する人たち、こんなふうに話してはいても、私たちはあなたがたについて、もっと良いこと、救いにかかわることがあると確信しています。

何か、こう4節から5節を語った、あるいは6節のところで彼が主張したものと全く違うようなことが、この第9節のところで語りかけ始められています。

なぜそういうことが起こっているのか、私たちは関心を向ける必要があるのではないでしょう。

＜信仰をもって生きる者＞

私たちは今、神の豊かな恵みが与えられて生きている。イエス・キリストの赦しによって、今在ることが保障されている。だが、神の民である恵みによって生かされていることを忘れ去っているとすれば、それは、あざみや茨が茂った土地のように、もはや打ち捨てられ、荒れ地になる以外ないのです。「惜しげもない無為の生活、喜びのない、感謝のない、讃美のない殺伐とした生活をする以外に道はない」と言っているのです。

ここでは非常にはっきりした形で、信仰をもって生きる者は、潤いのある、緑の若草を萌え出させる土地と同じように、実りを豊かにし、他の者に生きる喜びを与え、感激を与え、感動を与える存在なのだと言っています。

しかし、あなたがたの生活が、他の人々に生きる喜びを与え、感激を、感動を、潤いを与える存在になることなしに、他の人々の心を殺伐とさせるような生き方をしているとすれば、それはもはや神に向かって生きてはいないと言われているのです。

(この表現は人生を長く生きたことによって体験できるものではないかと考えます。もし自分が70代で終わっていたら、この文章には抵抗していたと思います。長生きさせてくださったことに感謝です。)

著者の率直な気持ちから言えば、「あなたがたは今、枯れた土地になりかけている状況にあるが、努めて若草の芽が萌え出るような自らに変わらなさい、砂漠になりきらないうちに変わらなさい」と警告しているのです。

「どんな良い業をしてみても、それがこの歴史を変える力にはならない。どんなに祈っても私たちの周囲は変わらない、どんなに善意をもって隣人に仕えたとしても、その人々の魂を救うには至らない、もう、私たちにできることは何もなくなった、現実には私たちを必要としないのだ」こう考えが連鎖になったとたん、あなたがたは砂漠になる。

(だから「にも拘わらず」に生かされてきました。少数者の存在の意味を示さねばならないと思います。)

今、あなたがたが置かれている立場はよく分かるけれども、しかし、その砂漠にイエスは御降誕して下さり、花咲く野辺にしてくださったではないか。その瓦礫の山に主は御自分がお立ちになることによって、御言葉を享受できる潤いある牧場としてくださったではないか。そこに、キリストがお立ちくださることをしっかり認識できるならば、そこで希望を失うはずはないと訴えざるを得ない状況に置かれているのです。

(このフレーズに目頭が熱くなりました。)

＜一人前のキリスト者＞

この「一人前のキリスト者」とは何なのかと言うと、「どんな状況の中に立たされていても、そこにイエスが共にいてくださることが認識できる生き方をしているキリスト者」という意味です。

私たちは近代文明の中に生を置いていますから、どちらかという結論でものを見ることが多いのです。一所懸命やってもいい結果が出なかった、何が足りないのだろうと考える、そういう習癖があるのです。ですから、結論で業の可否を見始めると、絶望的に業を判断する傾向が圧倒的に高くなるのです。

愛をもって仕えていても通じない、心を注ぎ出して祈っていても相手は変わらない現実。そういう現実にも何度も何度もチャレンジしているうちに「ああ、やっぱり駄目なのだ」という絶望感だけが私たちを捉えてしまう。

そして主が扉の外に立って叩き続けていらっしゃることを、少しも考えられなくなってしまう。そういう生き方をしているのは、もはやキリスト者の姿ではないと言うのです。

自分のやったことが、たとえ何の効果も出なくとも、神が期待していることが何一つできなかったと思っても、そこに主が立たれて共に見てくださると信じて生きてゆく時に、その何の効果も出なかった業を嫌がらずに、コツコツとやり続けられた恵みの喜びを感じとることができるのだ。それが実は、後に出てくる『忍耐』という言葉なのです。

この9節で、

「しかし、愛する人たち、こんなふうに話してはいても、私たちはあなたがたについてもっと良いこと、救いにかかわることがあると確信しています。」

と言っていますが、「神の恵み」それは、「私たちが、たとえ不信仰極まりない状態に追い詰められて、しゃがんでいるような状況にあっても、困惑の中に置かれて、にっちもさっちもいかず歯ぎしりをしている状態にあっても、それがすべてではない、あなたがたにはそれを超えるもっと良いものが与えられているのだ。現実があなたを生かしているのではなく、あなたを生かしているのはイエスだ。そのお方が、あなたを支えていてくださることをしっかり覚えるならば、現実がどうであろうと、そこに神の勝利を見るだろう」と告げています。

＜赦しの福音の中に飛び込む＞

これは正に、あの日、すべてのものが暗黒に包まれたベツレヘムの郊外で、不思議な星がきらめいている下に立っていた羊飼たちが、寒さの中で羊の群れを気遣い、あるいは夜更けに襲ってくるかもしれぬ野犬の群れに心を配りながら、できる限り注意深く、しかも恐れに震えながら、時を過ごしていたその真っ只中で、「**恐れるな**」という声を響かせてくださった神の、「今こそあなたがたに救い主が与えられるのだ」という貴い御告げ、これが福音なのです、喜びの知らせなのです」

この「喜びの知らせ」というのは、自分たちが予想することもできなければ、計画することもできなかった出来事、何度もチャレンジしたけれども失敗した出来事だった。そういう出来事が神の一方的な恵みによって、今宵、実現するのです、そういう御告げがあったのですから。彼らはそこで大きな喜びを感じたのです。

「救い」とはそういうものです。あなたがたは現実を前にしてどうしたら神の要求に自分が合致する者になれるかと汲々として生きるのではなく、もう少し別な表現で言えば、自分の罪だけに目を留めて、どうしたら罪のない生き方ができるだろうかと心を配り、一生懸命になるより、むしろ「赦しの福音の中に思い切って飛び込みなさい。そのことによってキリストの恵みに生きることが出来ますよ」と著者は告げるのです。

よく私たちの使う言葉の中に、「ふさわしい」という言葉があり、「信仰者にふさわしい生き方をしているかどうか」などをお互いに話し合います。「信仰者としてふさわしい生き方」とは、私たちに何ができるのかとか、何をしようとしているのかということがとかく問題になります。自分自身の生活の中に、「神を信ずる者はかくあらねばならない」という非常に崇高な一つの人間像を描き出し、そういう人間像に自分が近づけるように、人格や品性の向上に一所懸命になることに執着し、熱心にそれを鍛えあげていこうとする。そういうことが「熱心な信仰生活をしていることだ」と考えてしまう人が沢山います。

ところが、「あなたがたはそういうことに失敗したからこそ神に赦されたのだから、赦されていなかった時代に戻って、もう一度そんなことに汲々とすることは止めたらどうだろう。もし今でも、せっかく救っていただいたのだから、そのお方に満足されるような人間にならなければならないと考えているなら、神は『何とお前たちは水臭い』とおっしゃるのではないだろうか」と。そのような言い方を、ここで著者は私たちに向かって語っています。（厳しさの中にもユーモアを交えて親しく語られた松山先生を思います）

では、神は私たちをどうご覧になっているのか、それを「不完全な者、不十分な者であるがゆえに他ならぬ神が愛してくださり、憐れんでくださっているのだから、その信仰が神の助けによって成熟してゆけるように願い求めて生きてゆくことが大事なのだ」と言っています。

「成熟」という言葉は自分で成すことを意味していません。木の実が熟してゆくのも、木自身が熟させるのではなく、下から与えられる養分、外から与えられる光、あるいは風、水、様々なものが、そこに注ぎこまれることによって一つの果実は結実し熟してゆくのです。一生懸命に私が熟した木になろう、立派な実になろうと努力しても、残念ながら何の役にも立たない。

正にそれは賜物であり、恵みであり、神から与えられる大きな憐れみに依っているのであって、私たち自身の力で出来上がり、私自身で成り上がっていく、そのように到達できる目標とは違うのです。だから、神が愛してくださった、イエスがこの私のために命を捨ててくださった、神の大きな愛が独り子さえも惜しまないでこの世に送ってくださった、その事柄にあなたがたの思いをいつも集中させ、その御方がいつも支えてくださっているという確信に立って、あらゆる現実に関わって行きなさい。ここに神の愛があるのを片時も忘れないで今日を生きて行きなさい、そういうことがここでは告げられているのです。

第10節、

神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません。

＜二重否定の意味＞

「神は不義な方ではないので」とありますが、私たちはここを読む時、すごくせっかちに進みがちになります。「神は不義な方ではない、神は義なるお方である、だからそういうことなのだ」とぼつと読んでしまいますが、あえてこの著者が「神は義なる御方なので」と書かないで「不義なる御方ではないので」と二重否定で書いた理由は何だったんだろうかを少し考えて見たいのです。

私たちの現実を見ると、義であることと義でないことと、その間に「ちょっと義である」こととか、「88パーセント義である」とか等々、一杯あるというわけです。そんな中で、「全く義でないという御方ではないので...」というのは、多少の義があったとしたら、それを愛でてくださる御方、そのことに目を留めてくださる御方なので、『あなたの小さな一歩をもお忘れになる御方ではない』という読みかえができると、この『不義な方ではないので』という言葉は正に慰めに満ちた表現となるのです。

つまり、「神は完全なる義の御方ではあるけれども、と同時に、完全に義ではないという人以外は御自分の義に引き寄せてくださり、御自分の義を足らざる義に注いでくださり、それを満たしてくださり、義の人であると認めてくださる御方なので」ということなのです。

先月の終わりは宗教改革の記念日でした。マルチン・ルターは「神の義」ということを非常に大事に考えました。彼は「神の義」を大きく三つの柱を建てて考え「唯信仰、唯恩寵、唯聖書」（「ソラフィデー、ソラグラティア、ソラヴィブロス」）ということにおいて信じたのです。

神の義がどこに示されているかというのと、神が信仰を与えてくださった恵みの中に示されている。しかもそれは神の恩寵であり、顧みであり、豊かな憐れみであり、私たちへのプレゼントである。下支えをしてくださる御力である。この神の義によって私はキリスト者であり得ると同時に、それは神の御言によって保証されたものである、という意味でルターは聖書を大事にしたのです。

この御言の中に神の恵みがぎっしり詰まっています。だからこの御言に立って私たちが生き続ける限り「神の義」を受けている者として存在しているのです。

私たちがつくる罪の影は、神から遠く離れれば離れる程、汚いものとして長く残ります。神に近づけば近づくほどその影は短くなりますけれども、神は、神の方に向かっているということのゆえにそのすべての影を帳消しにしてくださる。罪のない者として取り扱ってくださる、それが恩寵なのです。

あなたがたには以前、「神は裁き主だ」と語ったけれども、その裁きを受けるべきあなたがたに対して同時に「弁護者」として立っていらっしゃる御方なのだ。「今、私が語らな

ければならないのは罪に対して厳しい御方であると同時に、小さな義に対しても、お見過ごしにならない憐れみ深い神であることを覚えて欲しいのだよ」というように書いてあるのです。

「そのことの方が、今のあなたがたには非常に大切なことだと思う。あなたがたの働きや聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示してきたあの愛をお忘れになるようなことはありません。神はどんな小さな事柄であっても、よしんばそれが何の役にも立たなかったような時にも、神の名のためになした業は、すべてを御自分の記憶の中に留めてくださり、それを用いてくださろうとしているのですよ」と書いているのです。

これはもう一度考えてみるべき事柄だと思います。

私たちは合理主義の社会に生きていますから、力を出した時に、その力相応の結果が得られないと虚しかったり、不十分だった、役に立たなかったと考える癖がついています。ところが聖書の信仰は神の名のためにしたことであれば、役に立たないことは何一つないと告げるのです。

特に、現実の迫害の中で揺さぶられているヘブライ人に向かってこの著者は、そのことを強調するのです。ここで必死になって神の御前に愛の業に励んできても、現実の世界には何の役にも立たなかったなどと諦めないで、あなたがたのしてきた小さな業は神によって用いられて、来るべき神の国を造り上げて行くために欠かすことのできない大事なものとして神に覚えられている。

事を成すのはあなたがたではなくて神なのです。だからその御方のために為すのであれば、小さな石ころ一つ積み上げることであったとしても、神はそれを無駄にはなさらず、生かして用いてくださるのだと、一所懸命になって語っているのです。

第11節、

私たちは、あなたがたのおのおのが最後まで希望を持ち続けるために、同じ熱心さを示してもらいたいと思います。

第12節、

あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしいのです。

<神の忍耐の凄さ>

これは大変面白いモチーフだと思うのです。「信仰と忍耐」という言葉がここで並べられています。神を信じること、これがある注解者は、この信仰と忍耐というのを両方とも自分たちの業として「私たちの神に対する信仰と、私たちの忍耐強い信仰生活によって」と読んでいますし、そう読んでいる人たちが比較的多いのです。

けれども、これをもう少し丁寧に読んでいきますと、私たちが神を信じられるように導かれている事実を見据えながら、私たちが、信じ続けることによって全く良い成果を上げ

られない駄目な信徒であったとしても、神は忍耐をもってその信仰を完成させてくださるという「神の忍耐」もこの言葉の裏側にあっていいのではないかと思います。いやむしろここで、著者は「**神の忍耐**」を称えているのではないだろうかと思うのです。

私は毎年、年の始めの礼拝で必ず教会員に向かって言うことがあるのです。それは「神はよくも忍耐強く、キリストをお与えになってから二千年の間我慢してくださっている」ということです。

当然、私たちは滅びなければならない、滅ぼされても仕方がなかった存在であるにも拘らず、神はまだ我慢していてくださっている、そういう神が私たちを愛するがゆえに堪えていてくださる「忍耐」。当然裁いて、合理的にもっと能率良くことを進めよとお考えになってもしかるべき御方が、極めて能率の悪い、非合理的な私を抱えこんで、大事に持ち運んでくださり、信仰ある者として養い育て上げてくださろうとしていらっしゃる、その「忍耐」。それがあるからこそ「主を待つ」ことができる存在になりうるのだ、そんなことをどうしても考えないわけにはいかないのです。

本当に私たちは信仰と忍耐とを絞り出して、やっそこさ持ちこたえられる状況の中に、今置かれています。我慢して、我慢して神の御言を、神の御救いを隣人に語りかけ、証し続けていかなければならない状況に置かれています。でも、その忍耐は神の忍耐と比べたら、比べものにならないほどちっぽけなものです。

イエス・キリストが十字架の上で、「すべての罪が赦された、歴史は贖われた」と宣言されたにも拘らず二千年経っても世界すべてが贖われていない現実（日本は平均1%以下のクリスチャン人口）。神の恵みが恵みとして通用しない。「神はすべてのものをお創りになった」と聖書が何度私たちに語りかけても、「いや、そんなことはない、良いものだけを神は創られた。」と考える。

「そういう意味で、私たちは神の御思いに従って、御心を大切にするのではなく、自分たちの常識や見識をすごく大事にして、それに合致するものこそが義であると判断しながら生きている。そんな傲慢な者をも、神は御手の中に支え続けてくださる、固く握りしめ続けてくださって、神の国が来る日には、神の国に入ることができるようにと保ち、堪えていてくださる。そういう神の忍耐によって初めて、私たちは困難な現状の中で、小さな愛を少しばかり実践することが許されている」そういうことではないかと思うのです。

「あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって」という言葉がこの10節のところに出っていますが、この「聖なる者たち」という言葉は、ご承知のように様々な困難の中にありながら、神を信じている人たちを「聖なる者」と呼んでいるのです。

別な言い方をすれば、神から選び出していただかない限り、私たちは神によって生かされている恵みを感謝する者にはなれない。私たちが今日尚も、「神様」と呼びかけることができているのは、神の忍耐に支えられているからなのだ、ということを本当に知った故に、神が選び出し、忍耐をもって支えていてくださる方々が「聖なる者たち」なのです。

立派な人たちとか聖人君子たちとか、しっかり教会生活をしている人たちとか、そのように書いてあるわけではないのです。辛うじて信仰生活を保つことを許されている人々も、神の憐れみにあずかっているに違いなく、神の恵みに生かされている人々なのです。

<「聖なる者たち」とは>

ですから、「聖なる者たち」は、当たり前の状態にはない人々なのだと書いているわけです。ゆえに、イエスをキリストと信じることは、この手紙を書いた時点においても、今日においても、当たり前ではありません。当たり前ではないことをやろうとするわけですから、それなりに覚悟が必要です。あるいは、それなりに私たちは（肩に力を入れる意味ではありませんけれども、）身構える必要があるのです。この世における当たりの生き方を続けようとして願っている限り、私たちは信仰に生きることはできないと思います。つまり、「聖なる者」という言葉はそういう意味であり、よく「聖なる者」と言うと、立派な人、聖人君子を考えたりしますが、決してそうではないのです。神によって、『当たりの状態から取り分けられた人』という意味なのです。ですから、信仰生活とは、ある意味で当たり前でない生き方なのです。

イエスが私たちを救うために神の奇しき御力によって勝利されたならば、この世から喝采を受けたでしょう。ところがイエスは十字架におかかりになったままであられたために、誰からも喝采を浴びられないどころか、罵倒されたのです。神の御子として、当たり前ではない生き方をされたわけです。

それが私たちの救いのためになくはならないことだった。そういう当たり前でない生き方を自分の生き方として生きる、そのことがイエスをキリストとして信じて生きてゆく生き方であり、そのことが私たちが神から聖なるものとされた証しなのだ。そんな風に言うことができるだろうと思います。

つまり、聖なる者になることは、私たちは時には大変誤解をしてしまうことが多いわけで、もう一度そのあたりをはっきりさせておく必要があるだろうと思います。そういう同信の仲間たちのために、一所懸命何とか神の道を生きたいと模索しつつ為している愛の労、小さな愛の営みが虚しく見られてしまうような現実が、あなたがたの周りには積み上げられ過ぎているけれども、そんな結果に左右されてはなりません。

神はその一つ一つをしっかりと覚えていてくださる。見逃されることはなく神の国の歴史の創造にこれを用いてくださっている。自分たちの小さな業さえも神は覚えていてくださるという、その事柄を、私たちこそが本気になって信じて生きてゆかない限り、現実の中で神の御言に生きることを意味を見失ってしまう事実がそこにはある、という現状認識を著者は語っているのです。

この現状については、「今は悪い時代なので」という言葉で、はっきりとエフェソの信徒への手紙の5章16節の中にも記されています。

「あなたがたは自分の行動に注意しなさい、今は悪い時代なのだから、この世の力に飲み込まれてしまわないようにしっかり立ちなさい」と言っているわけですが、確かに今、私たちの生きている時代は、神なしに生きることが、痛くも痒くもない平気の平左と思える

時代なのです。むしろ神に頼って生きることの方が異常な生き方をしているように感じられる時代なのです。そういう時代の中に生きているのだから、「神から私たちは当たり前でない生き方をするように選ばれた存在であり、聖なる者なのだという認識をしっかりと持ちなさい」と言っているように思われます。

つまり、絶望を感じるような現実の中で、良い結果が出なくても、絶望しなくていいのです。あなたがたにはどんなに小さく、何の役にも立たなさそうに見えても、神のために為しているとすれば、それはやがて神が豊かな水がを注ぎ、光を注いでくださった時には芽を出し、花を咲かせることができる、神はそれを覚えて大事に育ててくださる。だから、あなたがたは現状の成功、不成功あるいは完成、不成功に心を奪われないで、一步一步神の業を進めていこうではありませんか。それが「忍耐」ということなのだと言っているのです。

<忍耐とは>

忍耐とは、じっと我慢することではない。神がこれを大事に育ててくださると信じて、神におあずけすることなのです。忍耐という言葉はそう読んでいくと、すごく変わるので

神がじっと待っていらっしゃるから、あなたがたのした小さな良い行いも、神の御前には大きなこととして受けとめられていく。そしてそれを神が用いてくださる日のあることを信じて、その日に向けて一つ一つの業を進めて行きなさい。そんなことをここでは語りかけているのです。

私はこの箇所を読みながら、ここでは、「あなたがたは集団として」というのではなく、「一人ひとりの問題」としてというのがすごく大事なことで提起されていることを同時に覚えておきたいと思います。

神の御前に生きることは、時には、私たちがあの人この人と手をつないで共に生きることではなく、私一人が神の御前に召し出され、神に生かされる者として、生きることなのです。

しかも、それは私一人の問題ではなく、明らかに全体にかかわる問題であるのです。

<「聖なる教会を信じる」とは>

使徒信条の中に「我は聖なる公同の教会を信ず」という一つの告白があります。あれは勿論、聖霊信仰を告白する中に入っているのですが、聖霊の御助けによって与えられた聖なる教会を信じます、と言った時の「聖なる教会を信じる」というのはどういうことなのだろうかと考えて見ます。それはとても大事なことになるだろうと思います。

たとえば、「私は教会を信じます」と言う時には「教会が私を養い育み、神の民として造り上げてくださることを信ずる」ということなのです。それと同時に、「私が聖霊をいただくことによって、私が教会を神の教会としていくことができるものとして、働けることを信ずる」わけです。「教会と私」というものは、そこでは全く相互作用としてお互いが神の恵みの中で成長させられていく、そういう関わりにおいて信じ合う絆の群なのです。

ですから「教会と私」、「私と同じ信徒たち」という出会いは、お互い同士が豊かに助けられて生きるのではなく、「神御自身に庇護され支えれながら、一人ひとりを成長させる群れとして今日も生き、明日も生き、祈り合ってゆく、そういう群が教会なのだ」ということなので、この世では既に完成した教会ではないのです。完成した教会は、天にしかない。」のです。

ですから、やはり、私たちの教会は傷を負い、痛みをもった教会なのです。「成長途上にある教会、しかしその成長途上にある教会でありながら、神はそれを『聖なる教会』として、特別に区別された教会」として、支えられ、憐れんでくださるのです。

だから、私たちは聖なる者にならねばならない、などと張り切ってしまってはいけません。支えてくださっているその恵みを、私たちは一つひとつ神の出来事として確認しつつそこで生きていこうではありませんか。人から「聖なる教会ではないよ」などと言われたとしても、神が私たちを支えてくださっている限り「聖なる教会」なのだということをしっかり覚え、この私が神によって支えられていると同じように、この教会も神によって支えられることによって、やがて来るべき日に天の教会の相似形としてその中に取り入れられて成長し、成熟し、完成して行く。そうした成熟を楽しみにしながら生きる教会として養われて行くことが大事なのだと、このヘブライの信徒に向かって語りかけているのです。

ユダヤ人たちは、「神殿、掟の箱は完結したものであつて、完成したものである。だから、私たちはその前にひれ伏す以外にない」という教え方をして来たわけですから、そういう人々に向かって「不成熟なものでも、神の憐れみの対象になり得る」ということを語るとは、さぞや大変なことだったろうと思うのです。しかし、この著者は恐れなくて、そのことを語っています。

神に支えられ清められていることであつても、それは未だ素晴らしいことでも何でもないのだ。

それはむしろ憐れみを受けなければならない存在であることの確認をする過程なのだ。救われた者であるということは喜ばしいことであり、感謝すべきことではあるけれども、同時に、救われなければならないほどの罪人だったのだということを容認すべきことなのだ。

「砂漠のような状態であつたとしても、それが私たちの現体質であつて、そこにある私たちを、愛をもって、潤いのあるものに変えてくださっておられるのは、イエスの十字架なのだ。それを忘れたら、あなたの信仰はないのだ」ということをもう一度語りかけることによって「絶望的になりかけている教会に希望を与え、枯れ果ててしまいそうな信仰にもう一度水を注いでよみがえらせる営み」を、著者は、この9節から12節までの短い部分で語ろうとしています。

今まで述べて来た原則論を越えて、更に、あなたがたにはもっと素晴らしい展開がある。それは、イエス・キリストがいてくださることだと語りかけることによって、立ち直りを

期待する、そしてそのキリストという御方はどんな御方なのかをもう一度学んでみましょうという、心のゆとりを持たせて「大祭司キリスト論」というものに、もう一度立ち戻っていかうとしていることです。

「頭の中で考えた信仰ではなく、今、息づいている信仰を生きてほしいのだ」ということをこの著者は必死になって訴えかけている箇所がこのところではないかなと思います。パウロも色々な教会に対して発信した手紙の中で、叱責したり問題を指摘したり、お前たちは駄目だと言ったりしていますが、よく途中で「私は語調を変えてあなたに話す」などと、まるっきり雰囲気を変えて話し始めたり、あるいは「この大きな字で私は手紙を書いている」などと言って、目の悪いパウロが自分の手による大きな字で手紙を送ったこともあるわけですが、そういうところで彼が語調を変えたのはなぜかといえ、「この私にはキリストの憐れみがあったからこそ、生かされている。あなたがたに対するキリストの憐れみは、私と同じように届いているのだ、ということをどうしても言わないではいられない、そういう神の愛に迫られて書いたからなのだ」と言えると思うのです。

この手紙は、そういう意味では律法主義の者に向かつては律法的なものを語り、旧約聖書を材料にしながら色々な問題点を指摘していった書物ではあるけれどもその中で「イエス・キリストの愛があるからこそ、私にはこれが言えるのですよ、そしてイエス・キリストがあなたを愛しているからこそ、私はあなたがたに対する愛を、こういう形で表現せざるを得ないのだ」ということを著者自身の思いをも込めて、この箇所では述べているのです。

<「一人前のクリスチャン」とは>

「一人前のクリスチャン」というのは、むしろ神にすっぱりと甘えて生きている、神の大きな恵みによって今日があることだけを信じて生きている、そういう者であります。そのために、たとえ良い結果が出なくても、神のためにと想着御前に献げる小さな祈り、小さな奉仕が神の御前には忘れられていないことを信じ、いと小さき業に勤しみ喜んで仕えること、それが「一人前の信者になること」なのです。

難しい教義や教理を無理にマスターしなくてもいい、聖書66巻全部が分からなければ、などと言わなくてもいいという優しさや寛容さがそこにはあるだろうと思うのです。ですが、キリストの大きな愛を知れば知るほど、もっともっとその愛を知りたい、究めたいと願うようになりますから、自然と御言に対する研讃を積むようになります、神の御言を求めてやまなくなります。そうして私たちが御言から御言へ、信仰から信仰へという養いをいただくことができるようになっていくと思います。

「覚える（忘れずに心に留める、記憶する）ことによって」、私は神の前に救われた者らしくなろうと思っても「覚えている」だけでは、神は決してそれを祝してくださるとは言われません。そこに、

「このヘブライ人への手紙のもっているいわゆる『律法主義の中に育ったヘブライの人』に向かって語っている特別な意味があるのではないか」と思いながらこの箇所を学んでみました。

(1996年11月9日)

「死の眠りに就いた方々の復活」

テサロニケの信徒への手紙一 4：13－18

森 容子

11月の第一ないし第二聖日には、多くの教会で、亡くなられた教会員の方々を記念する召天者記念礼拝をお捧げし、それを「永眠者記念礼拝」とされている教会もございますが、キリスト者の逝去を「召天」と捉えるか、「永眠」と捉えるか、という選択は、死生観の違いであります。

つまり没後のビジョンを、神様のおられる天に招かれるという「まっすぐに召天」と描くか、または、もっと現実的に捉えて、復活の日はそんなに早くは訪れまい、一旦永き永き眠りに就かれるという「当面は永眠」と描くか、ということですね。「すべては神のみぞ知る」という神聖なる事柄です。

私共は、教会員がお亡くなりになられた際、そのお方は肉体を離れた霊として、（殉教者以外は）確かに一旦眠りに就かれると考えますが、ご本人にとっては時間的経過の自覚が全く無い眠り（目を閉じて、次の瞬間、目を開ければ復活の朝）であり、イエス様が再び地上に来られる御約束の「再臨の日」には、神の民が一斉に天のパラダイス（天国の大庭）で目を醒まされ、復活のお体を伴って、御国への門の中へと誘われる「召天」であられると信じ、「召天聖徒」と呼ばせて頂いております。

そして、そうした死生観の根拠となっている聖書箇所のひとつが、ルカによる福音書23章の「三本の十字架」の下でイエス様が右の者に告げられた「よく言うておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。との御言であり、更に、本日のテキスト、テサロニケの信徒への手紙4章であるのです。

筆者のパウロは、キリスト教の初代教会における伝道者としてつとに高名で、パウロ無くして世界伝道はあり得なかったと言われるほど、主に良く仕えられたお弟子であられます。そのパウロが、彼の人生最初に書き送った手紙が、テサロニケの信徒に宛てた第一の手紙であり、恐らくパウロが、これだけは書かずにおられない、是非とも、何としても、これだけは伝え遺したい、という燃えるような熱意をもって執筆された手紙なのです。そして、その中でも特に4章13－18節の言葉は、キリスト者の死後に関する最重要なメッセージであると言えます。

ではこれから、私たちひとりひとりも、その重要な手紙の受け取り人となって、パウロから届けられましたメッセージを、味わわせて頂きましょう。

13 兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のよう

に嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。

大切なご家族、ご親族やご友人などを亡くされて、悲しみや不在の寂しさを覚えられないお方はおられません。ですが、それが絶望の嘆きへと落ち込み、果ては、生きる気力さえ全く失くしてしまうようなことがないようにと、パウロは、ご遺族に是非とも知っていて頂きたい、死後の眠りに就いたお方に関して主から示された重要なメッセージを、この手紙に託したのです。

14 イエスが死んで復活されたと、私たちは信じています。それならば、神はまた同じように、イエスにあって眠りに就いた人たちを、イエスと共に導き出してくださいます。

「イエスが死んで復活されたと、信じています。」というキリスト者たちの言葉は、今の今まで弟子たちに教えを説いてくださっていたイエス様が、突然、ローマ兵に捕縛されて十字架につけられ、非業な死を遂げられた事実が、人類の罪の贖いを果たされたことであると、信じているという宣言です。

それのみならず、十字架上でイエス様が亡くなり葬られた三日後に、主のお墓がもぬけの殻となり、その後主は、復活の御体をもって五百人もの弟子たちの前に姿を現わされたとの聖書の記載を、信じているということです。

私たちは、そのイエス様の十字架と復活との奇しい御業を信じたが故に、教会において洗礼に与り、罪を解かれて生きることがゆるされたのです。そして、その後も、イエス様の十字架と復活を信じることから離れないで、礼拝生活を送り続け、神様から与えられた寿命、即ち、天寿を全うして死後の眠りに就いた人々には、イエス様御自身の復活の時と同様の奇しき復活の御業が、神の御導きにより成就されると、パウロはここに記しています。

15 主の言葉によって言います。主が来られる時まで生き残る私たちが、眠りに就いた人たちより先になることは、決してありません。

この言葉を裏返して申しますと、「先に死の眠りに就いていた人たちがまず復活に与り、それから、主が来られる時まで生き残っていた、つまり地上で生活していた者たちが復活に与る」という、正しい順序があるということです。

16－17前半 すなわち、合図の号令と、大天使の声と、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストにあって死んだ人たちがまず復活し、続いて生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に出会います。

ここでいきなり、「主の再臨と、キリスト者の復活」という神の出来事が、非常に壮大なスケールのビジョンによって展開されていきます。 それは・・・

ある日、主イエス・キリストが地上に再臨される時に至り、先ず、地上を取り巻く大空一面に、祝砲のごとき合図の大神令が天よりもたらされ、次いで、大天使ガブリエルによ

り、主の御再臨を宣言する大声が轟き渡ります。そうすると、天の万軍の軍楽師たちによる神のラッパの演奏、祝福のファンファーレが壮大に鳴り響き、地球全体を取り囲むという次第でありましょう。

そうして再臨の舞台が調われ、そこに、光り輝く白き衣をまとわれた神の御子、主イエス・キリストが、かつて天にお帰りになる際に預言された通り、昇天されたと同じ場所、即ち、エルサレム郊外のオリーブ山の山頂に、栄光の雲に包まれて、天上より、厳かに、粛々と、降り立って、来られるのです。

この情景は、現代では、宇宙からの衛星放送により、全世界に同時中継されることでしょう。地上の全ての人がある光景を仰ぎ見るとの預言が、ここに成就されます。そうならましたら、皆さん、地上ではどうなると思われますか？

恐らく、世界中の人々が、押すな押すなとキリスト教会に押し寄せるのです。大リバイバルの嵐が、突然、全世界の教会に、吹き荒れるのです！

そうした喧騒のような渦中で、かつてキリスト・イエス様と共にあって生涯を全うされた召天聖徒と呼ばれる方々が、死の眠りから醒まされ、新しい肉体を与えられて復活されます。その上で、地上に残っていたキリスト者たち、最後の最期まで必死になってキリストの教会を守り、支え続けてきた人々が、死から甦った人々とひとつにされて、イエス様の大きな大きな腕の中に抱かれ、そして神の栄光の光に包まれた大きな大きな神の雲に包まれるのです。

そこでは、満面の笑みと、湧き上がる大歓声と、嬉し涙にぐしゃぐしゃになられる顔、顔、顔が、みーんな、ひとり残らずキリスト・イエス様のものとされて、ゆくりなく天へ向かって上ってゆくのです。その先では、召天聖徒として全きに聖められ、いとも厳かに、イエス様によって、天の国へ迎え入れられるのです。

17後半—18 こうして、私たちはいつまでも主と共にいることになります。ですから、これらの言葉をもって、互いに慰め合いなさい。

地上において、イエス様を仰いで過ごした人々は、天においては、もっともっと、ありありと目の前に顕現されるイエス様と、いつまでもいつまでも、共に在ることがゆるされるのです。これが、パウロが本当に語りたかった、ご遺族への、渾身の御慰めの御言葉です。

冒頭で、私は「亡くなられた教会員は、霊として一旦眠りに就かれる」ということを申しました。では、地上で、最後の最期までキリスト教とはご縁を結べないままに亡くなられた方々は、一体どうなられるのでしょうか？ ということが、問題になりますね。それは恐らく、その方々にも、霊としての死後の眠りというのがあり、その最中に「どうなられる？」のお答えがあると思われます。

その方々は、意識を失ったように自覚がなく眠り続けられるのではありません。定められた時点で、イエス様がそこに顕現され、主自ら、十字架の贖いを信じることによる、その方々の救い、天国への一筋の道を、丁寧の説き明かしてくださるのです。

そして旧約時代に、そうした死後の隣人への宣教を、我が身のすべてを捧げますとの犠

性を申し出て、神に執り成しを祈り願った方がおられました。それは、詩編88編の名も無きひとりの詩人であられます。その願いを叶えてくださったのが、主イエス・キリストであられ、十字架後の陰府下りであられます。

そして、その主イエス様直々の宣教の後に、「このことを信じるか？」と問われる主に向かつて、「はい、信じます。」とお答えして、永遠の命、復活のお体をお受けするか、「いいえ」とお答えして、本当に永久の眠りに就いてしまわれるかは、ご本人のお考え次第、全くの自由意志です。

しかし、召天者記念礼拝において、目には見えませんが、召天聖徒としてそこに出席しておられるだろう方々は、ご遺族の皆様と共に、是非とも天国で過ごしたいと、誰よりも深く、強く、ひたすらに願っておられることでありましょう。そして、この手紙を記したパウロと同様に、私のみならず、そこに出席しておられた教会員のお一人ひとりも、そのことを、皆様にお伝えせずにはいられないという真摯な心持で、深く祈っておられたことと存じます。

天国への救いへの道は、山登りのように幾通りもあるのではございません。唯一筋の道があるだけです。これに関して、ヨハネ福音書14章6節に、黄金の御言というのがあります。「**イエスは言われた。『わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、誰も父のもとに行くことができない。』**」この道というのが、神様の在す天国への道で、真理というのは、十字架の贖いによる救いであり、この命というのが、永遠の命でございます。 黙祷を致します。

＜あとがきⅡ＞

2025年11月25日

前回に続き松山先生は「一度」について特別の力を込めて語っておられます。

前回は「神との『一回の契約』は差し替えが効かない。」と語られた後に

「この手紙では、やり直しが効かないから（洗礼を授けられているから）、神が言われた通りに従う中で、私たちは生きています。そして、それは日々、神によって新しくされることによって造り変えられ、生きています。昨日のあなた（の罪）は問われない。あなたが前に進む限り、後に残してきた足跡を、神はご存じだけでも、そのことのゆえに、神はあなたを追求はしない。だから、前に向かって進むことが唯一の救われる道であるし、そして前に進むことをし続ける限り、神はあなたを恵むと約束してくださったから『自由』ではないか———」と述べられました。

そして6章3節「神がお許しになるなら、そうすることにしましょう。」と言われ「一人前のキリスト者になろうとする私の前に、この手紙の著者はもう一度厳しい警告をされるのです。

その警告の前に松山先生は「一度という言葉の中に含まれる内容」を示してくださいました。それは「イエス・キリストの受肉の事実、イエス・キリストの贖罪の事実、カルバリの十字架の事実、イエス・キリストの復活の事実、イエス・キリストの昇天の事実」の「神からの明確な啓示」です。「神が歴史の中に与えてくださった、それらの出来事を本当に

自分のものとして受けとめ、それによって生きている恵みを神から与えていながら、いつの間にかこの世の基準の中に押し流されて、信仰が光失せたものになってしまった人々にとっては「――」6節から8節にかけて実に厳しい語りになっています。そして、今、これを読む私は、自分が問われていると慄然とします。

ところが9節からは語調が変わります。

このようなところで、私は松山幸生先生とこの手紙の著者とが一体となって語っておられるような錯覚に陥ります。松山先生の声が聞こえてきます。

松山先生は説教で聖なる神の義についても語ってくださいましたし、その後には必ず神の愛を深く説いてくださいました。この著者が10節で「神は不義な方ではないので」と二重否定で語るのとそっくりでした。私に向かって「一人前のキリスト者になってほしい」そのために「最後まで希望を持ち続け」現状の世界がどんなに神の御心から乖離していても、迫害があっても「信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしい」と願っておられる。そのために神の忍耐を見習いなさいと言われる。この世の変遷は神が望まれる秩序を乱し続けています。迫害の時がくるかもしれません。それにも備えるように警告をしつつ力づけてくださっているのだと思います。パウロの言葉によって希望を語りたいと思います。

（ローマ信徒への手紙8章34節～38節）

34;だれが私たちが罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、私たちのために執り成ししてくださるのです。

35;だれが、キリストの愛から私たちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

36;「私たちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」と書いてある通りです。

37;しかし、これらすべてのことにおいて、私たちは、私たちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。

38;私たちは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低いところにいるものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、私たちを引き離す事はできないのです。」

松山幸生先生の「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の写書は森容子先生のご指導によって進んでおります。文字の校正だけでなく、文脈の補正をお願いして原文の趣旨を尊重しつつ、松山先生から30年の時代間隔を検証していただいております。加えて毎回関連する説教をお願いしております。今回は死者の復活について大胆に聖書に準拠して先生のお考えを分かりやすく説いていただきました。洗礼を授けられずに亡くなられた方への執り成しの祈り（詩編第88編の研鑽から導き出されたこと）及び主イエス・キリストの陰府への伝道によって、洗礼を受けずに亡くなられた方に対して天国への門が開かれるという説き明かし

された説教です。ここまで明瞭にしかも深く死後のことを説き明かしされている説教を寡聞な私には知りません。希望への確信がより強固になると私は思います。

2025年11月25日

小原靖夫

< 写者あとがき I >

2022年6月10日

「一人前のキリスト者の生活」から学ぶことが2回続きました。聖書箇所は第5章11節から6章12節です。このところは私（写者）の胸に痛恨の思いで胸に刺さり通しでありましたので、自分のために前回の復習をさせていただきます。重複をお許しくださいますようお願い致します。

(1) 信仰の立て直しということが、本当に可能なのか、

なんと私は甘いことを言っているのだろう。絶望的な気分になりました。

6章 4節から6節

- ④ 一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、
- ⑤ 神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、
- ⑥ その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。

私はこの箇所を読んだ時も、奈落の底に落ち、絶望的な気分になりました。もう取り返しのつかない状態になってしまった。午前4時30分に昇る朝日を見ることができなかった。

「死んだ行いを悔い改め、キリストの初歩を離れて、成熟を目指して進みましょう」と励まされても「神がお許しになるなら、そうすることにしましょう」・・・だが、果たして、神はお許しになるだろうか。期待と不安がよぎる。「死んだ行い」とは何だろうか。その次には何が言われるのだろうか。

(2) 著者は、この文脈で「大祭司論」を語りたかった。

5章11節「このことについては、話すことがたくさんあるのですが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、容易に説明できません」だから、著者は話を中断して5章11節から6章に渡って、現在墮落しつつあるキリスト者への警告をここに挿入しなければならなかった。

本来なら「大祭司論」という成熟した義の言葉を伝えたかったのだが、「どうも私（ヘブライ人への手紙の著者）の目には「あなたがたは耳が鈍くなっていて、どんなに説明しても正しく受け止めてもらえそうにないので、私は筆を中断して、あなたがたに耳を開くための警告を送る」と言ってこの挿入がなされた。

(2) その趣旨を知って、少し不安が和らぎはしたが、

警告が勧告に進むのか、裁きに進むのか恐れは消えなかった。「あなたの耳は鈍くなっている」その通りですと告白する。マルチン・ルターの声が聞こえてくる。「あなたがたは

無気力である。そして注意深く熱心に神の言葉を聞こうとしないで、自分サイドの物差しで、自分サイドの升で量って自分に適当なものだけを受け取っている」と。

聞く耳が固定観念で固まっており、聞き方がパターン化し、自分に都合の良い準拠棒を持ってよしとしている。「もしもあなたがたが、お恵みをいただくことにだけに関心があるような”信仰”を持っているとすれば、それは赤ん坊ですから、神の義などについては...、言い換えるならば「大祭司が私たちのために執り成しをし続けていてくださる」などということについては、何もわからないでしょうし、理解できないでしょう、無理でしょう。」あなたがたは「神は私を救ってくださる御方なのだ。その御方に依って私は既に救われているので、もう感謝なのです。それ以上、私は何を望むことがあるのでしょうか」と言っている状態ではありませんか。それは「自分のために神を信じている」という姿勢ではありませんか。」「だから今も、なんとなく教会に属している」のではありませんか。（まさに、私（写者）に突きつけられた暴かれた事実です。具の根も出ません。）

(3) 「死んだ行い」とは、

私たちのこの世の知恵や、私たちの慣習や、私たちの経験の産物を一切まとめて、『死んだ行い』と呼んでいます。

「死んだ行い」というのは別に役に立たなくなったり、時代遅れになったという意味ではなく、「命」を欠落させた行い、聖霊を無視してしまった行為、私たちの知恵や力や経験に頼った行為、この手紙が書かれた時代でいえば、律法であり、慣習であり、教会の儀式であり、そういったものが「死んだ行い」であると言っているのです。私（写者）に合わせれば「自分の力でなんとかしよう、なんとかしてあげようという傲慢です。「聖霊が働かなければ何事も起こらないという謙虚さ」これが欠落している。

ところが、主イエスが3年間の公生涯を歩まれた中で、良いとお考えになったのは何だったかということ「相手がそのことによって生きる」。それが良いことなのです。自分がそこにいることによって相手が生き、喜び、感謝し、希望が持てたら、それが良いことなのだ、私がそこでは見捨てられても、踏みつけられても、排除されても、相手がそのことによって生きられたら、それが良いことなのだと言っているのです。

(4) 「死んだ行いの悔い改め」とは、

「神への信仰」、それは「あなたの信仰は何に依っているのですか。何に向けて信仰は働いているのですか。それらが問われているのです。

イエス・キリストにあなたのすべてがかかっていると信じて、今を生きていますか？

あなたが語り、生きていることがキリスト・イエスなしにはできないことなのですか？

と問われています。キリスト・イエスなしにはできないことによって、私たちのすべてが貫かれること、それがここで言う「神への信仰」なのです。

(5) 「一度」ということ

松山幸生先生は、「この『一度』という言葉は、物すごく大事な言葉なのです。」と言われ、新約聖書の中ではおよそ31回程使われています。そのうちの11回がこのヘブライ人への手紙で使われています。そういう「一度」なのです。

「一度神の光に照らされる」、「一度天からの賜物を味わう」、「一度神の聖霊にあずかる」、ということは、そこで全く新しい事態が展開される、後戻りできない状況の中で私たちが生き始めたことなのです。信仰とはそういうことなのです。悔い改めとはそういうことなのです。

これは、「一度キリスト者として誕生した人間は、二度この世に生まれ直すことはできない、だから一度生まれたことが間違いだった、失敗だったと気がついたら、あなたの生涯は永遠に間違いであり、失敗でしかないのです、やり直しがきかないのです」ということなのです。

「これはすごい言葉だと思いませんか。一度救われたことが確固たるものとして打ち建てられたとするならば、それはあなたがたの一生を支配するものです。もしあれは間違いだったのだと感じたとすれば、あなたがたの一生は間違いでしかないのです」と言っているのです。こういう厳しさ、激しさを、「私たちは新約聖書の中に生きていますから、余り感じないので「旧約聖書の中で生きた、当時の信仰をもったヘブライ人たちはこのところが良く分かるのです」。「神との『一回の契約』は差し替えが効かないのです。」と。

この松山幸生先生の解説を読んで6章5節、6節の激しい著者の言葉が凄く愛に満ちた言葉に転換しそうな気配を感じました。ロトの妻の例を語られるのです。

例えばロトの妻を見てごらん。救ってやると神はおっしゃった、その代わり代替条件として「後ろを振り返らない」ということを求めた。その契約に従って彼女は救われることになっていたが、「後ろを振り返り向いた」ために彼女は塩の柱になってしまった。振り返りはできないのだ、やり直しはきかないのだ、決めて出発したら、もうその道にしか進めないのだ。（創世記のアダムとエバの約束不履行も同じようである）

（6）自由について

この例示はすごく面白いですがけれどもね、だからこそ「自由だ」と言うのです。

ヘブライ人への手紙ではやり直しがきかない、だから神の言われた通りにすればよいという中で、私たちは生きています。そして、それは日々、神によって新しくされることによって造り変えられて生きていて、昨日のあなたは問われない。あなたが前に進む限り、後ろに残して来た足跡を神はご存じだ、けれども、そのことのゆえに、神はあなたを追求はしない。だから、前に向かって進むことが唯一つの救われる道であるし、そして前に進むことをし続ける限り、神はあなたを恵むと約束してくださったから「自由」ではないか、という、その「自由」なのです。

やっと分かりかけてきた「キリスト者の自由」。暗闇の中に光が見えてきた喜びを私は感じ始めている。

それで、聖書の神は、「わたしの言葉に従って歩み続けているならば、その前がどんなであろうと、わたしはそのすべてを知っているけれど不問に付しましょう。」今、あなたが忠実に神の言葉に従って生きているならば、起訴されるよりは今日を生きた方がいいわけです。投獄されるよりは現実の中で、歴史の中に私たちの歩みを綴った方がいいわけで

す。だから、あなたがたは拘束され、投獄されなければならないところから解放されているという意味において「自由」なのです。

神の御言葉に従う最初の一步は礼拝です。やっとその実践が出来始めました。

キリストの言葉に従って生き続け、一度救われたら決定的なものだから、それに従い続けている限りでは、私たちのもっている罪責の責任は問われないということが「贖い」という言葉の中にはあります。従って、贖いは、契約によって私たちのものになるのです。そういうことで（利己的、打算的に聞こえるかもしれないけれども）契約というのは「信じること」です。神だけを自分の生きる拠り所「よすが」として信じること、神の言葉だけに全ての存在を託して生き続けること、それが信じることなのです。

神に従って生きれば、豊かな実を結ぶ。神に従って生きていれば自由を満喫できる。

この最初に味わった不安と恐怖が信仰の喜びに変わる。豊かな恵みを頂いて生きることができる希望が湧いてくる学びでありました。

最後に、第10回での大切な学びは「死者の復活」です。

死者の復活の信仰は旧約の中にもあります。イザヤ書（26章）の中にも、あるいはダニエル書（12章）の中にも出て来るのです。勿論、イエス御自身がマルコによる福音書（12章）の中で死者の復活について語られています。あるいは、パウロがコリントの信徒への手紙一の第15章で復活の問題を取り上げていますが、教会の大事な一つの問題が死者の復活だったのです。

つまり、私たちの人生は地上で終わるのではないこと、神は死んだ者をよみがえらせ、生ける者はそのままの姿で神の御前でもう一度裁きの座に立たしめられるという、その後にある永遠の審判ということと結びついてゆくわけです。

ここからまた新しい深い学びが始まるのです。

本号第11号も森容子先生のご丁寧なきめ細かな熟慮による推敲が数多くありました。そのお陰で本文が更に読みやすくなり、私（写者）は松山幸生先生と森容子先生のお二人の師から学ばせて頂いております。

特に本号締め括りはお二人の合唱です。繰り返しここに記し感謝の意を表します。

「難しい教義や教理をマスターしなくてもいい、聖書66巻全部分かったなどと言わなくてもいいのです、という優しさがそこにはあるだろうと思うのです。ですが、キリストの大きな愛を知ると、どうしてもっとその愛を知りたいと思いますから、御言葉に対する研讃を積むようになります、神の言葉を求めたくなります。そして私たちが御言葉から御言葉へ、信仰から信仰へという養いをいただくことができるようになっていくと思います。」との先生の厳しさの中の愛を感じて学びを続けます。